

## ふるさとを思う心を 語り伝えたい

### とっとり・民話を語る会



小林 龍雄 さん  
Tatsuo Kobayashi



鳥取県立博物館民俗資料室の『いるり端』で語る小林さん

昔々、あるところに…

糸車やいろりを使ったセツトの中に作務衣やもんぺを着た語り部が座り、おもむろに話し始めます。

「昔々、あるところにおじいさんとおばあさんが住んでいたのだって…」

絵や映像を使わずとも、子どもたちはあつという間におはなしの中に引き込まれていきます。

「鳥取・民話を語る会」のメンバーは15人。そのうち9人が、現在語りの活動を行っ

ています。

語りの依頼はひっきりなしに舞い込みます。小学校や保育園での子どもたちのためのお話し会はもちろん、公民館や老人ホーム、デイサービスセンターからも依頼があります。「週に1回は、3〜5人くらいでどこかに出かけて語りをしています。私たちも高齢者ですから、くたびれが出るんじゃないかと心配します」と、会長こばやし たつお小林龍雄さんは話します。

#### 語ってこそその民話

平成9年、境港市で環日本

海交流をテーマにした「夢みなど博覧会」が開催されました。その時、パビリオンの一つ、市町村館の一角に「民話語りコーナー」が設けられました。

「会期中は、毎週日曜日に3人ずつ交代で担当し、県内伝承のいろんな民話を語りました。それまで語りの機会はなかったんですが、そのとき改めて『民話は語るものだなあ』と実感しましたね」と当時を振り返ります。

小林さんはもともと民俗学に関心があり、その一環とし

て民話を勉強するために、「鳥取民話研究会」に参加していました。「そのメンバーの中で、民話語りを専門に取り組みたい7人が集まり、平成12年に今の『とっとり・民話を語る会』を結成したんですよ」と小林さん。

平成14年に全県で開催された国民文化祭でも、さじ民話会（とっとり市報平成19年6月号で紹介）、ほうき民話の会とともに、「日本の語りの部屋」という催しに参加協力しました。

佐治天文台長

こうさいひろき  
香西洋樹の「望遠鏡って何だろう」

Vol.25 望遠鏡って何？

今年、ガリレオ・ガリレイが望遠鏡を使って天体観測を行ってから400年の節目に当たる年です。これを記念して、世界中の天文学者の集まりである「国際天文学連合」が音頭を取って「世界天文年」という事業が進められています。

ところで、望遠鏡って何でしょう。多くの人は、望遠鏡など改めて考えることなく、「遠くのを大きくして見せてくれる道具」と思っていることでしょうか、それで「正解」です。みなさんの手元にある双眼鏡や観光地に備えられている観光用の双眼鏡なども望遠鏡です。意外に手近にある、遠くを望み見る道具ですね。この望遠鏡に使われているのがガラスで作られた「レンズ」と呼ばれる透明な物質です。

ガラスが発見されたのはとても古い時代で、ペルシャ文明の遺跡からも発掘されています。当時は身近な装飾品や道具に使われていたようです。

望遠鏡に使われている「レンズ」と呼ばれるガラスの製品の名前は、実は豆に由来します。中近東で今も多く栽培されている「レンズ豆」と呼ばれる豆がちょうどレンズそっくりで、中央部が膨らんだ形をしています。この豆によく似た形から「レンズ」と呼ばれるようになったそうです。このレンズ状のガラスを通して物を見ると、大きく見えることが知られてきたのです。



StarWorld  
見上げてごらん



富桑小学校の子どもたちが語りに引き込まれていきます

イメージの世界

以前、小林さんが子ども

たちに「徳尾の大坊主」(注)の話をしたときに、保護者の感想文で「話を聴いた子どもたちがそれぞれ絵を描かせてみると面白いですね」と書かれていました。「これが語りの良さ

です。民話を聴きながら、子どもたちはそれぞれが違った大坊主を頭の中に描くんですよ」と小林さんは力を込めます。

昔話といえ、懐かしい方言が付き物ですが、今の子どもたちにも分かる言葉で話します。小林さんによれば「民俗学の言葉で『変容』と言いますが、言葉が時代に合せてだんだん変わっていくことはかまわないのです」とのこと。話を聴いてイメージをどんどん膨らませてもらうためには、まずは言葉が伝わるこ

大切なのは「ふるさと感」

最近では、元大工町の城下町とつとり交流館「高砂屋」で、偶数月の第2土曜日に発表例会を行っています。語りの機会がたびたびあって、同じ人に話すこともあるので、常に新しい話の準備が欠かせません。

「みんなと一緒に練習すると、同じ話し方になってしまいうので、なるべく一人ずつで練習します。話も、以前は私が選んでいましたが、最近それぞれ自由に選んでもらっています。やっぱり自分が

読んで感動した話でないと、『型』にならないんですね」小林さんが気にかけるのは、子どもたちと地域の将来。「子どもたちに、民話を通して『ふるさと感』を伝えたいんです。これからは地方の時代。地方の特色は民話の中にあります。地方の時代には民話の伝承が必要なんです」と熱く語ります。

いつの時代にも人々に安らぎと教訓を与えてきた民話は、小林さんたちの活動によって、さらに輝きを増していくことでしょう。

(注) 徳尾の大野見宿禰命神社に伝わる伝説。夜更けに大坊主が現れる噂を聞いた男が、正体を見破るために赴き、茶店の主人に尋ねると…。